

想像力がつなぐ未知の世界へ

伊勢崎市立境南中学校 三年

栗原 千波

もし、あなたの大切な人が戦争で失われたら――
想像できますか？

今年、日本は終戦から八十年を迎えます。世界では今も自爆テロや空爆、内戦で多くの命が失われています。日本でこれからも戦争が起こらないと、本当に言い切れるでしょうか。

「なぜ戦争はなくならないのか」。私は改めてこの問いと向き合いたいと思います。

私たちの世代は戦争の恐ろしさを体験していません。私自身も以前は、戦争をどこか遠い国の出来事のように感じていました。そんな意識を変えたのは、祖父の沖縄戦の体験を聞いたことです。

祖父は昭和十六年、沖縄に生まれました。戦時中まだ四歳だった祖父は、戦火の中を家族と逃げ

回ったそうです。そして祖父の父は戦闘の犠牲となり、祖父は親戚の家へ養子に出されました。大切な父親を失い、家族と引き離された幼い日の記憶は、祖父の心に深く残っています。

私はこの話を聞いて、戦争の影響は戦時中だけでなく、戦後の人生にも大きく関わるのだと知りました。そして、もし祖父が命を落としていたら、私は今ここにいない――そんな現実にも気づかされました。命だけでなく、その先の未来まで奪い去ってしまう。それが戦争の恐ろしさです。

なぜ人は争いを繰り返すのか。戦争や異文化間の衝突の根底には、「他者を受け入れる余裕のなさ」や「知らないことへの恐怖」があると思います。価値観の違いや誤解が、対立を生み出します。自分の「正しさ」が相手にも当てはまるとは限りません。そんなとき大切なのが、「想像力」「共感力」「寛容性」「対話と傾聴」です。これらは、争いを回避するための土台になるはずです。

今、日本は「多文化共生社会」と言われています。私の学校にも、さまざまな文化的背景を持つ

友人がいて、宗教や文化の違いに配慮が必要な場面があります。そうした場面でも、相手に配慮することを自然にできる友人が多く、そのような温かい雰囲気をととても誇らしく思います。しかし、仮に「なぜみんなと同じようにしないのか」「わがままではないか」と誤解する人がいたら――そこには大きな心の壁が生まれてしまいます。寛容性を持って相手の習慣を受け入れ、対話と傾聴を通してその背景を学ぼうとすれば、壁は無くせるはずです。

今年の四月、私はドイツへバレーエの短期留学に行きました。初めての海外と言うこともあり、緊張していた私にとって、見知らぬ土地での毎日是不安も多くありました。滞在中一番印象に残っているのは、街中で人が自然に話しかけてくれたり、目が合うと笑いかけてくれたりしたことです。最初は驚きましたが、とても温かく、うれしい気持ちになりました。その優しさが、まるで励ましてくれているようで、見知らぬ国で過ごす私に勇気をくれました。文化が違えば日常の「当たり前」

も違います。でも、人と人が心を通わせる喜びは、世界共通なのだと感じました。

この経験を通じて、私は異なる文化をもっと知りたいと思うようになりました。自分の目で見て、耳で聞き、その空気を肌で感じてみたい――そう思います。相手を知り、自分を知ってもらうこと。そのためには、心の余裕や豊かさがが必要です。文学を読み、映画や音楽にふれ、歴史や芸術を学ぶことも、そのための手助けになります。

戦争の悲しみを繰り返さないために、私たち一人ひとりができることは何か。その答えは、過去を学び、今を見つめ、未来を想像することの中にあると思います。「知らない」ということに、恐れず向き合う。そして、想像力をもって他者を理解しようとする。それが、戦争のない未来への第一歩になると私は信じています。